



Title	溶融SiO ₂ -CaO-MgO系スラグの粘度に及ぼすTiO ₂ の影響
Author(s)	中本, 将嗣; 積川, 靖弘; 清瀬, 明人 他
Citation	高温学会誌. 2006, 32(1), p. 74-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

溶融 $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO}$ 系スラグの粘度に及ぼす TiO_2 の影響

Effect of TiO_2 on the Viscosity of Molten Slag in $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO}$ System

中本 将嗣*・積川 靖弘**・清瀬 明人***・李 俊昊****・田中 敏宏*****

Masashi NAKAMOTO, Yasuhiro TSUGAWA, Akihito KIYOSE, Jonhoo LEE and Toshihiro TANAKA

(Received September 16, 2005)

The viscosity of molten $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-TiO}_2$ slag was measured using a rotating cylinder method at the concentration of TiO_2 0~20 mass% at 1673 K. At $\text{SiO}_2\text{:CaO:MgO}=60\text{:}25\text{:}15$, $55\text{:}30\text{:}15$ and $50\text{:}35\text{:}15$ (mass% ratio), the viscosity of molten $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-TiO}_2$ slag decreased with increasing the concentration of TiO_2 . The experimental results were compared with the calculated results from Urbain's model which reproduced well the present experimental values in molten $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-TiO}_2$ slag.

Key Words: Viscosity, Molten Slag, TiO_2 .

1. 緒言

鋼の連続鋳造においてモールドフラックスの主な目的は溶鋼上面の酸化防止, 溶鋼から浮き上がってきた介在物の捕捉, 溶鋼上面の保温, 鋳型と鋼との熱伝達, 鋳型と鋼との潤滑・緩衝である¹⁻⁴⁾。モールドフラックスは SiO_2 , CaO , Al_2O_3 を主成分とした酸化物から構成されており, 上記の役割を果たすためには各酸化物の成分を制御する必要がある。

一方, 近年数 μm 以下の微小な酸化物を変態核, 析出物の核として有効に利用する新しい材質制御技術の開発がオキサイド・メタラジーの研究として進められている⁵⁻⁹⁾。ここで, 凝固時に酸化物を生成させることは鋼中に酸化物を微細に分散させる有力な方法の1つである。通常のAlキルド鋼では, Alの脱酸力が強いため, 溶鋼中の溶存酸素は低く, 凝固中の酸化物の晶出は極めて少ない。そこで, 凝固時に酸化物を生成するために, Alと比較して脱酸力が弱く, 凝固前に溶存酸素が含有される Ti 等による脱酸法が用いられる。このような Ti が溶鋼中に多く含まれている高 Ti 鋼を連続鋳造する際には, フラックス中の SiO_2 が還元されると同時に Ti が酸化して生成した TiO_2 がフラックス中に取り込まれ, フラックスの組成が大きく変化する¹⁰⁾。このとき, 粘度などの

特性も変化し, 鋳造した鉄鋼に表面欠陥を生じたり, 操業の不安定を引き起こしたりと本来のモールドフラックスとしての役割を果たさない原因となる¹⁻³⁾。つまり, フラックスの粘度に対する TiO_2 の影響を知る必要がある。

そこで, 本研究では TiO_2 を含むスラグの粘度を測定することにより, TiO_2 の粘度に対する影響を調査することを目的とした。連続鋳造中の還元反応によって濃度の変化が予想される SiO_2 , TiO_2 を含む溶融スラグの粘度は $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 系¹¹⁾, $\text{SiO}_2\text{-CaO-TiO}_2$ 系¹²⁻¹⁴⁾, $\text{SiO}_2\text{-FeO-TiO}_2$ 系¹⁵⁾, $\text{SiO}_2\text{-K}_2\text{O-TiO}_2$ 系¹³⁾, $\text{SiO}_2\text{-Li}_2\text{O-TiO}_2$ 系¹³⁾, $\text{SiO}_2\text{-MgO-TiO}_2$ 系¹³⁾, $\text{SiO}_2\text{-MnO-TiO}_2$ 系¹⁶⁾, $\text{SiO}_2\text{-Na}_2\text{O-TiO}_2$ 系¹³⁾, $\text{SiO}_2\text{-CaO-Al}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 系¹¹⁾, $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-Al}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 系^{17,18)} において測定されている。一般的なスラグ成分 SiO_2 , CaO , MgO , Al_2O_3 については TiO_2 を含む5元系まで測定されているが, $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO}$ に TiO_2 を加えた系については報告例がない。また, $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-TiO}_2$ 系は Fig.1 に示すように 1673 K において $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO}$ 系から TiO_2 に向かって液相領域が大きく広がっており¹⁹⁾, スラグの粘度に対する TiO_2 の影響の調査に対して有用な系であると言える。そこで, 本研究では $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-TiO}_2$ 系に関して, 連続鋳造中の TiO_2 の濃度の変化として考えられる 0~20 mass% TiO_2 ¹⁰⁾ を含有するスラグ

* 大阪大学大学院学生 マテリアル生産科学専攻 (〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-1)

Graduate Student, Osaka University (2-1 Yamadaoka, Suita, Osaka 565-0871, Japan)

** 大阪大学学生 現: 三宝伸銅工業㈱ (〒590-0906 堺市三宝町 8-374)

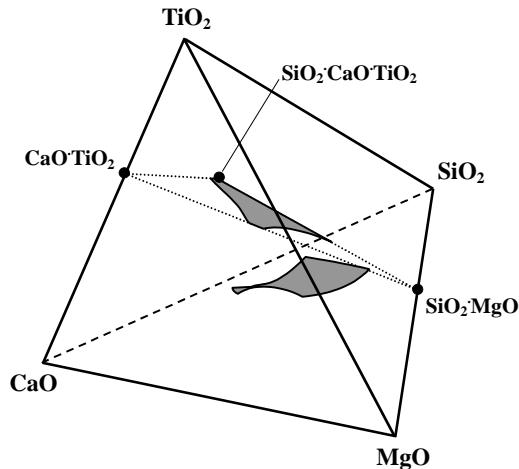
Student, Osaka University, now with Sambo Copper Alloy Co., Ltd. (8-374 Sambo, Sakai, Osaka 590-0906, Japan)

*** 新日本製鐵株式會社 技術開発本部 環境・プロセス研究センター (〒293-8511 千葉県富津市新富 20-1)
Steelmaking R&D Div., Environment & Process Technology Center, Technical Development Bureau, Nippon Steel Corporation (20-1 Shintomi, Futtsu, Chiba 293-8511, Japan)

**** Division of Materials Science and Engineering, Korea University (5-1 Anam-dong, Sungbuk-ku, Seoul 136-713, Korea)

***** 大阪大学大学院工学研究科 マテリアル生産科学専攻 (〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-1)

Division of Materials and Manufacturing Science, Graduate School of Engineering, Osaka University (2-1 Yamadaoka, Suita, Osaka 565-0871, Japan)

Fig.1 Liquid region at 1673 K for $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-TiO}_2$ system¹⁹⁾.

の粘度に対する TiO_2 の濃度依存性を 1673 K において 3 つの $\text{SiO}_2\text{:CaO:MgO}$ 比に対して調査した。

2. 実験

実験試料には試薬の SiO_2 , CaCO_3 , MgO , TiO_2 粉末を用いた。 CaCO_3 を大気雰囲気下, 1273 K, で 5 h か焼して CaO を作製した後, SiO_2 , CaO , MgO , TiO_2 を Table 1 の組成で秤量の上, 乳鉢で粉碎, 混合する。Table 1 において Sample A~C, D~F, G~I は $\text{SiO}_2\text{:CaO:MgO}$ の質量比がそれぞれ 60:25:15, 55:30:15, 50:35:15 で TiO_2 濃度を 0, 10, 20 mass% と変化させた試料である。混合した試料を測定用の Fe るつぼに充填し, Ar ガス(1 L/min(s.t.p.))を流通させながら 150 K/h で 1673 K まで昇温後, 5 h 保持して予備溶解させた。るつぼの内径, 高さはそれぞれ 45, 100 mm である。測定に必要な試料を得るために充填, 溶解を 3 度繰り返した後, 粘度測定を行った。

回転円筒法による粘度測定に用いた装置を Fig.2 に示す。装置は高温粘度試験炉と回転円筒型粘度計から構成されている。予備溶解した試料の入った Fe るつぼを高温粘度試験炉の均熱帶部分に置く。Ar 3 L/min(s.t.p.)を流通させながら 150 K/h で 1673 K まで昇し 1 h 保持する。ゼロ点調整した回転円筒型粘度計にスピンドルを取り付けた W 棒を接続し, スピンドルを融体試料に浸入させ測定を開始する。4 つの回転速度で測定を行い, それぞれの回転速度における測定値の平均を試料の粘度とした。なお, 粘度計は標準溶液として 90, 100 % グリセリン水溶液, シリコンオイルを用いて校正している。これらの粘度はそれぞれ 0.145, 0.749, 0.975 Pa·s である。

3. 結果と考察

溶融 $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO}$ 系スラグにおける 1673 K の粘度の測定結果を Machin らの結果^{29,30)}とともに Fig.3 に示す。本測定値と Machin らの結果はほぼ同程度の値であり, Machin らの結果と同様に SiO_2 の減少により粘度が低下するという組成依存性を示している。Fig.4 は $\text{SiO}_2\text{:CaO:MgO}$ 比を一定にして TiO_2 濃度を変化させた際の粘度の測定結果であり, 質量

Table 1 Composition of slag samples (mass%) and measured viscosities (Pa·s).

Sample	SiO_2	CaO	MgO	TiO_2	Viscosity
A	60.0	25.0	15.0	0.0	1.66
B	54.0	22.5	13.5	10.0	0.77
C	48.0	20.0	12.0	20.0	0.45
D	55.0	30.0	15.0	0.0	0.98
E	49.5	27.0	13.5	10.0	0.49
F	44.0	24.0	12.0	20.0	0.31
G	50.0	35.0	15.0	0.0	0.56
H	45.0	31.5	13.5	10.0	0.34
I	40.0	28.0	12.0	20.0	0.22

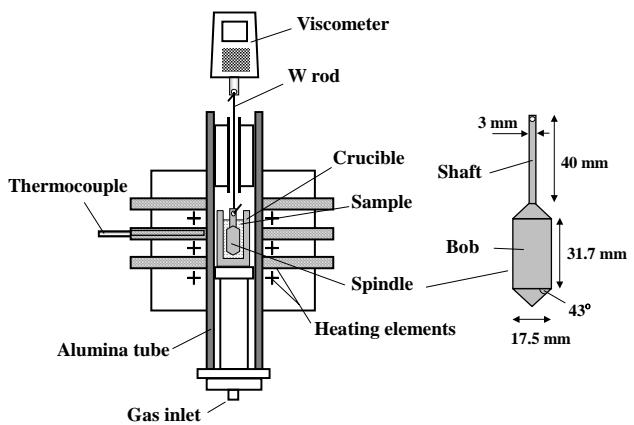


Fig.2 Apparatus for viscosity measurements.

比で $\text{MgO:SiO}_2\text{+CaO}=15:85$ の平面内に示している。Fig.4 において $\text{SiO}_2\text{:CaO:MgO}$ 比が一定のとき TiO_2 が増加するに従い粘度が減少している。溶融 $\text{SiO}_2\text{-CaO-TiO}_2$ 系スラグにおける Schenck ら¹²⁾, Dingwell¹⁴⁾の測定値を Fig.5 に示す。測定者間でばらつきは見られるが, $\text{SiO}_2\text{:CaO}$ 比に関係なく TiO_2 は粘度を下げる傾向にあり, Fig.4 に示した本測定結果から溶融 $\text{SiO}_2\text{-CaO-TiO}_2$ 系スラグに MgO を加えた場合においても TiO_2 は粘度を減少させる挙動を示すことがわかる。また, Fig.4 と 5 から溶融 $\text{SiO}_2\text{-CaO-TiO}_2$ 系スラグに MgO を添加した場合には粘度が低下していることがわかる。

溶融スラグ, スラックスの粘度推算についてはスラグの化学組成と温度の関数として経験的に定式化され, 多数の粘度式が提案されており, 現在ではスラグの構造に関するパラメータや熱力学量を変数とする粘度式が報告されている(例えば, Urbain ら²²⁻²⁴⁾, Riboud ら²⁵⁾, Iida ら²⁶⁾, Seetharaman ら²⁷⁻²⁹⁾, Zhang ら^{30, 31)}, Nakamoto ら³²⁾)。Mills ら³³⁾ は Urbai らのモデルがその簡便さにより, 溶融シリケートスラグの粘度の評価において最も幅広く利用されているモデルの 1 つと報告している。そこで, 溶融 $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-TiO}_2$ 系スラグにおける本研究の測定値と Urbai らのモデルによる計算値との比較を行った。

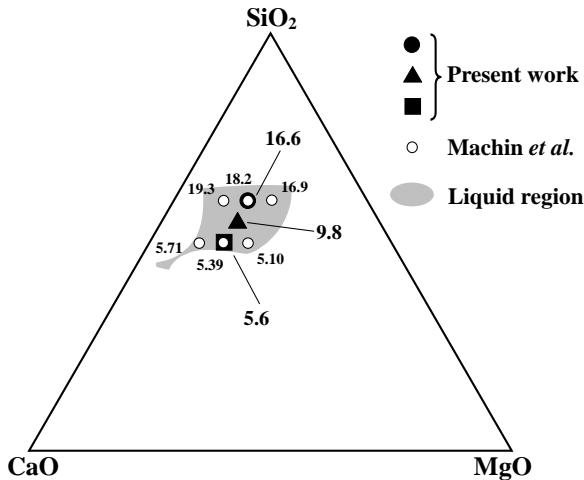


Fig.3 Viscosity measurement results (Poise = 10 Pa·s) and results of Machin et al.^{20,21)} for $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO}$ system at 1673 K.

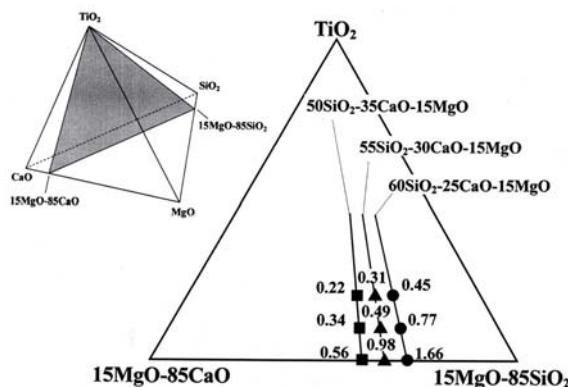


Fig.4 Experimental results of Viscosity (Pa·s) for $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-TiO}_2$ system at 1673 K.

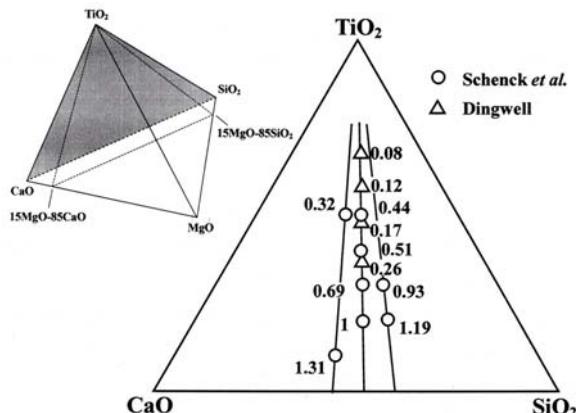


Fig.5 Experimental data of Viscosity (Pa·s)^{12, 14)} for $\text{SiO}_2\text{-CaO-TiO}_2$ system at 1673 K.

Urbain ら²²⁻²⁴⁾ のモデルではスラグ成分を以下に示す 3 つのカテゴリーに分類している。

(i) 網目形成酸化物

$$X_G = X_{\text{SiO}_2} + X_{\text{P}_2\text{O}_5}$$

(ii) 網目修正酸化物 フッ化物

$$X_M = X_{\text{CaO}} + X_{\text{MgO}} + X_{\text{Na}_2\text{O}} + X_{\text{K}_2\text{O}} + 3X_{\text{CaF}_2} + X_{\text{FeO}} + X_{\text{MnO}} +$$

$$2X_{\text{TiO}_2} + 2X_{\text{ZrO}_2}$$

(iii) 両性酸化物

$$X_A = X_{\text{Al}_2\text{O}_3} + X_{\text{Fe}_2\text{O}_3} + X_{\text{B}_2\text{O}_3}$$

上式中の X_i は各成分 i のモル分率である。

また、粘度の温度依存性が Weymann の式³⁴⁾に従うとし、以下の式により粘度を記述している。

$$\eta = A \cdot T \cdot \exp(10^3 \cdot B / T), \quad (\text{単位: Poise} = 10 \text{ Pa·s}) \quad \dots(1)$$

ここで、 A は

$$- \ln A = 0.2693 \cdot B + 11.6725 \quad \dots(2)$$

のように B の関数となっており、 B は次式で表される。

$$B = B_0 + B_1 \cdot X_G^* + B_2 \cdot (X_G^*)^2 + B_3 \cdot (X_G^*)^3 \quad \dots(3)$$

A, B の単位はそれぞれ(Poise/K)および(K)である。

X_G^* は網目形成酸化物の“規格化された”モル分率であり、

$$X_G^* = X_G / (1 + X_{\text{CaF}_2} + 0.5 X_{\text{FeO}_{1.5}} + X_{\text{TiO}_2} + X_{\text{ZrO}_2}) \quad \dots(4)$$

で与えられる。パラメータ B_0, B_1, B_2, B_3 は Table 2 中の式で表され、 α は式(4)と同じ因子で“規格化された”網目修正酸化物 フッ化物のモル分率 X_M^* 、および両性酸化物のモル分率 X_A^* を用いて、次の(7)式で与えられている。

$$X_M^* = X_M / (1 + X_{\text{CaF}_2} + 0.5 X_{\text{FeO}_{1.5}} + X_{\text{TiO}_2} + X_{\text{ZrO}_2}) \quad \dots(5)$$

$$X_A^* = X_A / (1 + X_{\text{CaF}_2} + 0.5 X_{\text{FeO}_{1.5}} + X_{\text{TiO}_2} + X_{\text{ZrO}_2}) \quad \dots(6)$$

$$\alpha = X_M^* / (X_M^* + X_A^*) = X_M / (X_M + X_A) \quad \dots(7)$$

Fig.6 は溶融 $\text{SiO}_2\text{-CaO-MgO-TiO}_2$ 系の本測定値に対して TiO_2 の濃度依存性と Urbain らのモデルによる計算結果を示して

Table 2 Equations for B -parameters in Urbain, et al. model²²⁻²⁴⁾ for viscosity.

$B_0 =$	13.8	+	39.9355 α	-	44.049 α^2
$B_1 =$	30.481	-	117.1505 α	+	129.9978 α^2
$B_2 =$	- 40.9429	+	234.0486 α	-	300.04 α^2
$B_3 =$	60.7619	-	153.9276 α	+	211.1616 α^2

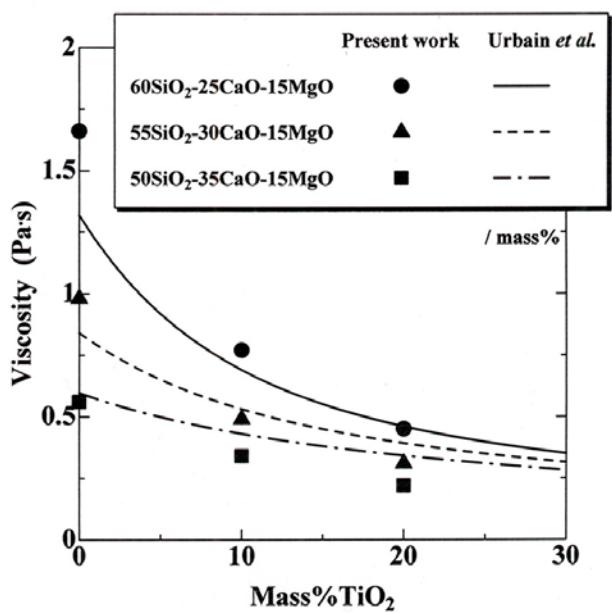


Fig.6 Comparison between experimental results and calculated

viscosity values from Urbain, *et al.* model²²⁻²⁴⁾.

いる。Urbain らのモデルによる計算結果は TiO_2 の濃度の増加により粘度が減少する傾向を示しており、本実験結果における TiO_2 の濃度依存性を良く再現している。これより溶融 $SiO_2-CaO-MgO-TiO_2$ 系スラグにおける本実験の組成領域において粘度の推算には Urbain らのモデルが適用できることがわかる。

4. 結言

本研究では溶融 $SiO_2-CaO-MgO-TiO_2$ 系スラグの粘度に及ぼす TiO_2 の濃度依存性を明らかにするために、 $SiO_2-CaO-MgO-TiO_2$ 系で 0~20 mass% TiO_2 を含有する溶融スラグの粘度を回転円筒法により 1673 K において測定した。また、その測定値と Urbain らのモデルによる計算値との比較を行った。溶融 $SiO_2-CaO-MgO$ 系スラグにおいて本研究での組成領域では TiO_2 は粘度を減少させることができた。また、Urbain らの粘度モデルは溶融 $SiO_2-CaO-MgO-TiO_2$ 系における本測定値の組成依存性を再現することがわかった。

引用文献

- 1) 浅野 鋼一: 日本金属学会会報, **19** (1980), 724.
- 2) K. C. Mills: Steelmaking conference proceedings, (1991) 121.
- 3) 徳光 直樹: 高温学会誌, **19** (1993) 97.
- 4) K. C. Mills: ISIJ International, **43** (2003) 1479.
- 5) J. Takamura and S. Mizoguchi: Proceedings of The Sixth International Iron and Steel Congress, (1990) 591.
- 6) S. Ogibayashi, K. Yamaguchi, M. Hirai, H. Goto, H. Yamaguchi and K. Tanaka: Proceedings of The Sixth International Iron and Steel Congress, (1990) 612.
- 7) 後藤 裕規, 宮沢 壽一, 山田 亘, 田中 和明: 鉄と鋼, **80** (1994) 25.
- 8) H. Goto, K. Miyazawa, W. Yamada, and K. Tanaka: ISIJ International, **35** (1995) 708.
- 9) K. Miyazawa: Science and Technology of Advance Materials, **2** (2001) 59.
- 10) A. Kiyose, K. Miyazawa, W. Yamada, K. Watanabe and H. Takahashi: ISIJ International, **36** (1996) S155.
- 11) V. Martin and R. Weber: Archiv fur das Eisenhuttenwesen, **36** (1965), 1.
- 12) V. Schenck and G. Frohberg: Archiv fur das Eisenhuttenwesen, **33** (1962) 1.
- 13) 中村 崇, 森永 健次, 柳ヶ瀬 勉: 日本金属学会誌, **41** (1977) 1300.
- 14) D. B. Dingwell: American Mineralogist, **77** (1992) 270.
- 15) P. Kozakevitch: Rev. Metallurg., **9** (1949) 572.
- 16) 山羊 繁, 溝口 数一, 杉之原 幸夫: 九州工業大学研究報告, **40** (1980) 33.
- 17) J. V. D. Colf and D. D. Howat: J. South African Inst. Min. Metall., **79** (1979) 255.
- 18) D. Xie, M. Yuwen and G. Zhaoxin: Gangtie, **21** (1986) 6.
- 19) M. Kowalski, P. J. Spencer and D. Neuschiitz: Slag Atlas 2nd Ed., (1995) 178.
- 20) J. S. Machin, T. B. Yee and D. L. Hanna: Journal of The American Ceramic Society, **35** (1954) 322.
- 21) J. S. Machin and T. B. Yee: Journal of The American Ceramic Society, **37** (1954) 177.
- 22) G. Urbain, F. Cambier, M. Deletter and M. R. Anseau: Trans. J. Br. Ceram. Soc., **80** (1981) 139.
- 23) G. Urbain: Rev. Int. Hautes Temp. Refract., **11** (1974) 133.
- 24) G. Urgain: Steel Research, **58** (1987) 111.
- 25) P. V. Riboud, Y. Roux, L.-D. Lucas and H. Gaye: Fachber. Httenprax. Metallweiterverarb., **19** (1981) 859.
- 26) T. Iida, H. Sakai, Y. Kita and K. Murakami: High Temp. Mater. and Proc., **19** (2000) 153.
- 27) D. Sichen, J. Bygden and S. Seetharaman: Metall. Mater. Trans. B, **25B** (1994) 519.
- 28) F. -Z. Ji, D. Sichen and S. Seetharaman: Metall. Mater. Trans. B, **28B** (1997) 827.
- 29) S. Seetharaman, Du Sichen and F.-Z. Ji: Metall. Mater. Trans. B, **31B** (2000) 105.
- 30) L. Zhang and S. Jahanshahi: Metall. Mater. Trans. B, **29B** (1998) 177.
- 31) L. Zhang and S. Jahanshahi: Metall. Mater. Trans. B, **29B** (1998) 187.
- 32) M. Nakamoto, J. Lee and T. Tanaka: ISIJ International, **45** (2005) 651.
- 33) K. C. Mills, L. Chapman, A. B. Fox and S. Sridhar: 6th Int. Conf. Slags Fluxes Molten Salts, **1** (2000) 1.
- 34) H. D. Weymann: Kolloid Z. Z. Polymer, **181** (1962) 131.